

歴史探訪

クラブ! 其の157

History Inquiry Club



文化生涯学習課 ☎23局3635
FAX 22局3811

変わったトイレ事情

左の写真を見てください。ある家から頂いた白い背景に青色の美しい文様が描かれた焼き物です。その正体は「小便器」です。同時に大便器も頂いてきました。市では便器まで集めるのか、などとあきれてこの文を読んでも



いる方もいるかもしれません。

さて、今やトイレは家の一室。内装もかわらない部屋に、便器がすえてあるつくりです。商業施設では、美しくデザインされ、最先端の器具をそろえたトイレが話題となつて、それを目的にお客さんが寄るほどです。トイレはくつろぎの場所のひとつなのかもしれません。

昭和40年代までは、トイレは汲み取り式でした。学校などでも大便器の下は直接便槽だった、いわゆる「ぼつとん便所」。便器の下の暗闇に得もいわれぬ恐怖を感じたものでした。汲み取り式のトイレは、便槽が臭うだけでなく、暖かくなると虫がわいて不衛生です。また、民家の玄関脇の1mも満たないスペースに、地中に甕が埋めてあり、そこに直接小便の用を足しました。玄関の脇にトイレがあるなど、今の子どもたちではまったく考えられないでしょう。これらの甕や便槽にたまった排泄物は、畑の肥として利用され、江戸時代では、立派な商品として流通していたほどです。

▲小便器

水洗式のトイレが普及し始めたのは昭和40年代後半から。現在の小便器はセンサー式の洗浄が主

流です。当時は、ハンドルをひねって水を流しました。ずいぶん面倒と思つてしまいましたが、それでもトイレに水が流れ、きれいになり臭いがしなくなることは、実に画期的でした。

現在では、古代以来伝統的な「うんこずわり」の和風便器から、腰掛ける洋風の便器が主流となつていいます。そのうち和風便器が何か分からなくなる時代が来るかもしれません。

下の写真は、恐らく大正時代の瀬戸で焼かれた便器です。金隠しは、木製の雪隠の形を引きついでいます。

この便器を使用したお宅は、戦前に財をなしました。当時としては皆が驚く、垂ゼんのトイレだったことでしょう。一般の民家では、小便は玄関先、大便は家の外が当たり前でした。それでも、臭いや雰囲気など、長居はしたくない場所だったことでしょう。

現在、田原市では下水道事業が進められ、トイレの事情もずいぶん変わりました。この便器を見て、忘れかけていた「臭うトイレ」の時代を思い出してしまいました。

(増山)



▲瀬戸で焼かれた大便器(大正時代)

今月の「表紙」

▼桜の開花状況が毎年、気になります。「もうそろそろ咲くかな」と3月中旬ごろから楽しみにしていても、日常に追われ、気付いたら満開の時期が終わっていたなんてこともよくありました。地に足を付け、風の暖かさを肌で感じ、目で季節を楽しむ心の余裕は、とても大切だと思ふこのごろ。一瞬のきらめきを逃さないように。(M)

【表紙の写真】田原市博物館の桜と親子